

(2026年3月3日発行)

日本口腔顔面痛学会理事長 福田謙一

広報委員会担当理事 山崎英子 委員長 池田浩子

今回は、2025年12月から4日から6日にかけて開催された Japan Pain Week について、社口歯科クリニックの飯田啓人先生に報告していただきます。

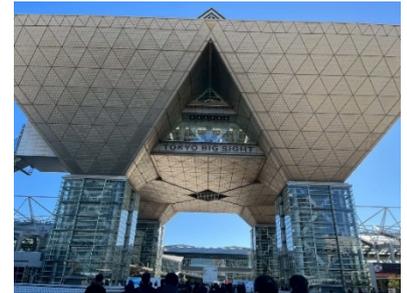
## Japan Pain Week 参加報告

社口歯科クリニック 飯田啓人

2025年12月4日から6日に Japan Pain Week (JPW) が東京ビッグサイトにおいて開催された。今回は第47回日本疼痛学会(大会長:松原貴子先生 神戸学院大学), 第18回日本運動器疼痛学会(大会長:園畑素樹先生 独立行政法人地域医療機能推進機構佐賀中央病院), 第29回日本ペインリハビリテーション学会(大会長:城由紀子先生 名古屋学院大学)と第30回日本口腔顔面痛学会学術大会(大会長:金銅英二先生 松本歯科大学)の4学会による我が国初の合同開催となった。

開会式終了後の10時から4学会の大会長による会長講演が行われた。それぞれの大会長はこれまでのあゆみとこれからをテーマに約10分間の講演をされ、その後各会場においてシンポジウム・特別講演・教育講演が3日にわたる日程で始まった。

本学会では医師・歯科医師・薬剤師・看護師・理学療法士・臨床心理士・柔道整復師・鍼灸師の方々が痛みとその治療方法に臨床や基礎医学の面から講演発表を行うため、会場もポスターの場所を除いて第1から第6まで設けられ、オンデマンド配信があるとはいえ拝聴したいセッションが数多く、絞り込むのに苦労した。その為まずは自分が興味を持って拝聴出来た講演等と気になった点について記述していこうと思う。



会場の東京ビッグサイト



4学会の大会長の先生方

### 1) シンポジウム 8

#### 「日本に求められる痛みのパラダイムシフト戦略を議論せよ」

ここでは、3名の先生(①若泉謙太先生 慶応義塾大学医学部麻酔学教室, ②江原弘之先生 西鶴間メディカルクリニックリハビリテーション科, ③白田頌先生 慶応義塾大学医学部歯科口腔外科)が講演を担当された。

① 中等度の痛み(NRS 4/10程度)を伴う慢性疼痛患者は、痛みによる苦痛のため、仕事や日常生活に支障をきたす状態に陥りやすい。そして、この痛みを治してもらいたいという希望のもと医療機関を受診するが、期待通りの結果が得られないと、不安やストレスがさらに蓄積される。このような状態が長く続くと、「自分のこの状態は治らない」という思い込みが生じ、症状が一層悪化するという、いわゆる痛みの負の連鎖に陥ってしまう。さらに、改善を求めて医療機関を探し続け、自分に合った治療を受けられる施設を求めてさまよう「ペイシェントジャーニー」と呼ばれる迷宮状態に迷い込むことも少なくない。本シンポジウムでは、このようなメカニズムを解説したうえで、そこから脱却するための対応戦略について説明がなされた。その戦略として、

② SNSを活用した治療・施術法の講習会の紹介や、③ 自己診断およびセルフケアとして実施可能な簡単な施術方法(マッサージ・ストレッチ等)を組み込んだスマートフォン用アプリを開発し、実際に運用している事例が詳細かつ分かりやすく紹介された。アプリという存在は、患者および医療従事者双方にとって有用であり、

今後さらに普及すれば素晴らしいと思った。

## 2) 痛み学会連合共催シンポジウム 1 (日本頭痛学会)

### 「頭痛治療の連携を探る－三叉神経・自律神経頭痛 TACs を中心に」

ここでは日本口腔顔面痛学会において頭痛に関する知見を教授してくださっている井川雅子先生（静岡市立清水病院口腔外科）が三叉神経・自律神経頭痛の各々の疾患（群発頭痛・発作性片側頭痛・短時間持続性片側神経痛様頭痛発作・持続性片側頭痛）について歯科との関連性を含めて解説された、また菊井祥二先生（社会医療法人寿会富永病院脳神経内科・頭痛センター）が、それらの詳細並びに治療方法を解説された。これらの疾患では歯痛を伴うことがあり、歯科を受診する患者が存在すること、そして歯科医師は医療面接を通じて正確な診断を行い、専門医に紹介する際は発症時期、部位、頻度、性状、随伴症状、病悩期間といった必要事項を簡潔にまとめた紹介状を作成する重要性を学んだ。



## 3) 一般演題 15 頭痛・口腔顔面痛

2 日目には本セッションの口演発表を拝聴した。頭痛・口腔顔面痛に関する演題の中でも① O2-37「頭痛を訴える気象関連性疼痛患者での頸椎アライメントの評価」（櫻井博紀先生 常葉大学 保険医療学部・愛知医科大学 疼痛医学講座）と② O2-42「顎関節症患者における顎関節症状、身体症状の負担感および口腔機能の関連に関する調査」（島田 淳先生 医療法人社団グリーンデンタルクリニック・日本大学歯学部総合歯科学分野）の2 演題が興味深かった。

### ① O2-37「頭痛を訴える気象関連性疼痛患者での頸椎アライメントの評価」

近年注目されている気象関連性疼痛について頸椎の角度の変化が疼痛発症に関与することを CT 画像などを用いて解析した研究結果の報告であった。本疾患は、姿勢不良やスマートフォンの過剰使用といった悪習癖によって増悪する可能性があり、今後さらなる研究・報告があればぜひ拝聴したいと感じた。



① O2-37 の口演発表

### ② O2-42「顎関節症患者における顎関節症状、身体症状の負担感および口腔機能の関連に関する調査」

顎関節症の原因として、生活習慣や悪習癖に加え、心理社会的要因がリスク因子として関与している点に着目した発表であった。通常の診察・検査・医療面接により顎関節症と診断された患者を対象に、口唇閉鎖能力、舌圧測定、SSS-8（身体症状スケール 8）を用いて解析した結果、顎関節症患者では口唇閉鎖能力および舌圧との相関が認められ、SSS-8 の評価値が高い患者ほど咀嚼筋痛障害（顎関節症 I 型）や舌圧低下を呈する傾向が示された。

現代社会における生活様式やストレスとの関連が深く、知らずにいると慢性化・増悪する危険性があることを再認識させられ、大変勉強になった。



② O2-42 の口演発表

#### 4) ランチョンセミナー7

##### 「アセトアミノフェンはなぜ効くのか」

本学会ではランチョンセミナーが 11 講演用意されており、その中でも本講演は特に人気が高く、チケットは早々に完売していた。正規での参加は叶わなかったが、キャンセルが出たため何とか参加することができた。

アセトアミノフェンの作用機序は長らく不明であったが、近年の研究により解明が進みつつある。本薬は肝臓で p-アミノフェノールに代謝され、脳内で FAAH (脂肪酸アミド加水分解酵素) により AM404 (N-アシルフェノールアミン) へ変換される。この AM404 が中枢において内因性カンナビノイドの取り込みを阻害し、痛み伝達を抑制する。また、脳幹から脊髄へ向かうセロトニン下降性抑制路を賦活し、痛みの感じにくさを増強するほか、TRPV1 (カプサイシン受容体) への作用を介して痛み過敏性を抑制する仕組みで鎮痛効果を発揮することによってであった。講演を担当された河野達郎先生 (千葉大学医学部付属病院麻酔・疼痛・緩和医療科) の話も解りやすく大変勉強になった将来的に AM404 が製剤化されれば、非常に有用な鎮痛薬となる可能性があり、今後いち早く開発が進むのを希望する。



ランチョンセミナーのお弁当

#### 5) 教育講演 11

##### 口腔顔面痛の評価／口腔顔面痛の個人差

学会 3 日目最終日の朝一番の講演として、坂本英治先生 (九州大学病院口腔外科) による「口腔顔面痛の評価」を拝聴した。慢性疼痛には、診断が不十分なために難治化した疑似性のものと、診断は適切であるが難治化した真性のものがあり、真性慢性疼痛はさらに原因不明の一次性と、組織障害などに起因する二次性に分類される。本講演では、一次性の真性慢性疼痛について、先生ご自身の経験を踏まえた解説がなされた。

組織や機能に問題がないにもかかわらず痛みを感じる背景には、感覚だけでなく情動、すなわちその人が抱える独自の「苦」が潜在的に関与している可能性があり、それを考慮した治療の重要性を学んだ。また、口腔顔面部は四肢や体幹と比較して恐怖心が増幅しやすく、それが痛みに影響する点についても理解を深めることができた。

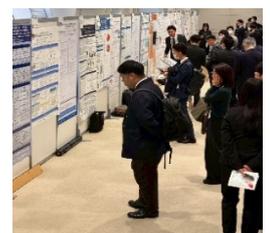
続いて福田謙一先生 (東京歯科大学口腔健康学講座) の講演を拝聴した。歯科麻酔分野における神経障害性疼痛の研究が主であるという印象を持っていたが、遺伝子工学にも深い造詣をお持ちであることに驚かされた。同じ薬剤であっても、効果が高く副作用の少ない患者がいる一方で、副作用が強く全く効果を示さない患者が存在するが、その個人差を遺伝子解析により明らかにし、適切かつ適量の薬剤選択が可能となれば、非常に意義深い医療になると感じた。現在は限られた疾患にとどまっているが、将来的には AI なども活用し、疼痛コントロールへの応用が進むだろう。



坂本 (左)・福田 (右) 両先生

#### 6) ポスター展示等について

ポスター展示は第 2～第 6 会場 (6 階) 後方で行われており、発表数が非常に多いため、展示は 1 日のみで、展示・発表・撤去が行われる形式であった。そのため、事前に時間を確認していないと、シンポジウムや講演に集中している間に見逃してしまう可能性がある。また、オンデマンド配信のない講演と重なる場合、どちらかを諦めざるを得ないというジレンマも感じた。今後はこの点について改善等がなされることを期待したい。



ポスター展示

#### 7) シンポジウム 17

## 「三叉神経と脊髄神経 — 痛み情動とその可塑性：類似性と差異」

本シンポジウムでは、金銅英二先生（松本歯科大学解剖学講座）が三叉神経の末梢から中枢までを、加藤総夫先生（東京慈恵医科大学痛み科学センター）が中枢における痛覚伝導経路について、それぞれ解説された。金銅先生からは、三叉神経第Ⅲ枝に神経障害が生じた場合、その影響が他の神経枝（第Ⅱ枝）にも及ぶが、他の第Ⅰ枝・第Ⅱ枝での場合ではこのような事が起こらないという自らの動物実験を介した研究報告を講演で発表された。あくまでの動物実験で得られた知見であるが、下顎埋伏智歯抜歯やインプラント体を埋入する手術等において三叉神経第Ⅲ枝を誤って切断するような事故が起きないように最新の注意を払う

重要性を実感した。加藤先生からは、従来知られている三叉神経節から視床へ至る経路に加え、硬膜・角膜・歯髄といった組織では、三叉神経節から腕傍核を経由し、扁桃体中心核へ至る経路が存在することが、高磁場MRI解析により明らかになってきているとの説明があった。扁桃体中心核は恐怖や不安と深く関係しており、歯科治療時の恐怖心との関連を示唆する非常に興味深い内容であった。その後、閉会式を迎え、3日間にわたるJPWは終了した。

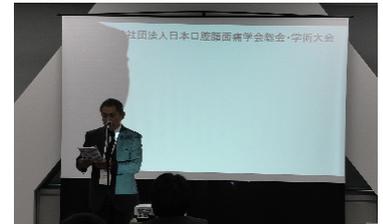


金銅(左)・加藤(右)両先生

## 第30回日本口腔顔面痛学会総会・学術大会 サテライトセミナー

JPW閉会直後、東京ビッグサイトに隣接するTFTビル東館9階908・909研修室において、第30回日本口腔顔面痛学会総会・学術大会サテライトセミナーが、「開業医における舌痛症と筋筋膜疼痛の現状と今後 — アンケート調査から見てきたもの —」をテーマに開催された。会員アンケートによる調査結果報告の後、筋筋膜疼痛および舌痛症の診断・治療について4グループに分かれ、ディスカッションおよび相互実習（筋触診、舌・歯肉定性感覚検査）が行われた。実際に体験することで理解が深まり、今後の臨床に応用していきたいと強く感じた。

その後、総括として筋筋膜性疼痛および舌痛症に関する講演を拝聴した。筋筋膜性疼痛は大久保昌和先生（日本大学松戸歯学部有床義歯補綴学講座 口・顔・頭の痛み外来）、舌痛症は野間昇先生（日本大学歯学部口腔内科学講座）が担当され、最新の知見を交えた内容であった。筋筋膜性疼痛では片頭痛と関連するCGRPの関与、舌痛症では漢方薬の応用による症状改善など、新たな知見を得ることができ、今後の診療体系に変化をもたらす可能性を感じた。閉会式をもってサテライトセミナーも終了し、疲労はあったものの、大変充実した気持ちで会場を後にした。今後3年間はこのような形態での開催が予定されており、オンデマンド配信を有効に活用し、復習や拝聴できなかったセッションの視聴を通じて、引き続き研鑽を積んでいきたいと考えている。そしてこの知識を是非、実際の臨床の場面で応用してみたい。



金銅大会長による開会の挨拶



相互実習（筋触診）

## 【飯田 啓人（いいた ひろと）先生のプロフィール】

【略歴】1990年 愛知学院大学歯学部卒業

1990年～1995年 愛知学院大学歯学部歯科放射線学講座勤務

1995年～現在 愛知学院大学歯学部歯科放射線学講座非常勤

2003年 博士号取得

2003年 社口歯科クリニック開院

【所属学会】

一般社団法人日本歯科放射線学会 認定医・歯科用CBCT認定医



一般社団法人日本口腔顔面痛学会  
一般社団法人日本顎関節学会  
一般社団法人日本歯内療法学会  
一般社団法人日本口腔科学会  
一般社団法人日本歯科麻酔学会  
一般社団法人国際歯科医療安全機構  
日本歯科人工知能（AI）研究会  
一般財団法人日本いたみ財団

---

日本口腔顔面痛学会 News Letter へのお問い合わせは

「日本口腔顔面痛学会事務局」まで

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11 一ツ橋印刷株式会社学会事務センター内

TEL: 03-5620-1953, FAX: 03-5620-1960 E-mail: [jsop-service@onebridge.co.jp](mailto:jsop-service@onebridge.co.jp)